

## 不可能を可能に変える発想法

今回は、「大人の仕事術」より「不可能を可能に変える発想法」を紹介します。

「それはできない」「無理です」「不可能だと思います」やりもしないうちから、簡単に不可能と言っただけのける。言われたほうも理路整然と理屈を説明されると、「そんなもんか」とつい信じてしまう。だが、ダメだ、できないという不可能を可能にしてことはこの世の中にはたくさんある。たとえば、有名な話だが、かつて、トヨタ自動車で「カイゼンの鬼」と異名をとった大野耐一さん(元副社長)が製造課長を呼んでこんな質問をしたことがある。「いま、生産台数はどのくらい?」「八十人で五千台です。」「そうか。一万台生産するにはどのくらいの人員が必要か?」「百六十人です。」「バカもの、そんなことは子供でもわかる!」課長はどえらく叱られてしまった。一万台の生産を上げるには、八十人で五千台の生産工場を二つ用意すればいい。足し算ならば、これで正解。だが、これでは「子供の仕事」「ガキの使い」ではないか。「大人の仕事」は違うのだ。効率性・相乗効果・能率を追及してこそその生産性向上である。大野さんの質問は足し算の答えを教えてください、というものではない。「労働力をかけずに生産性を上げる方法はないか?」と聞いたのである。質問された瞬間、まずこの事に気づかなければいけない。いったい、「カイゼンの鬼」と呼ばれる意味はどこにあるのか。この人の質問は常に生産性に関するものではないか。これがテーマなのだと連想しなければいけない。結局、この課長は機械や生産ラインの効率化、強力化などを展開し、百人一万台生産態勢の工場を作り上げることに成功する。もし、五千台で満足していたら、この生産態勢は実現しなかっただろう。足し算で考えている間は効率など上がらない。頭の発想を切り換えるには、達成したらすぐにハードルを高くしなければならない。自分をとことん追い込むことでしか、不可能は可能に転換できないのである。「できない」「無理だ」「不可能です」これらの言葉は、実はそもそも存在しないのである。というのも、不可能なことなどないからだ。不可能といった時、そこには次の三つの理由しかない。①一人ではできない。②いますぐにはできない。③いままでのやり方(方法・構造・仕組み・システム)ではできない。これらの不可能な理由を「できる」という理由に転換してしまおう。①チーム(プロジェクト・ネットワーク)でやればできる。②時間をかければできる(計画・段取り・段階を考える)。③やり方を革新する(機械化・ロボット化・人員一新などなど)。不可能ではなく、可能に転換する発想をしないから、いつまで経っても不可能と考えてしまうのである。このように転換できれば、「それは不可能です」と簡単に答えることなどなくなるだろう。

1) 不可能とすぐに答える理由は 3 つありますが何ですか?

( ) ( ) ( )

2) ハードルの高い要望があった時、あなたならどう対処しますか?

( )